



Title	近世後期、子どもの読み書き稽古と往来物
Author(s)	梅村, 佳代
Citation	書物・出版と社会変容, 15: 1-33
Issue Date	2013-10-20
Type	Journal Article
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10086/25965">http://hdl.handle.net/10086/25965</a>
Right	

## 近世後期、子どもの読み書き稽古と往来物

梅村 佳代

### はじめに

本論文では、これまで筆者がとりくんできた寺子屋（手習塾）入門帳をもとにした事例研究をとりあげ、近世社会の大人達が子どもに期待した読み書き算術の初学の内容構成と水準、及び識字力の獲得がどの程度に到達していたかを捉えることを目標とするものである。それは子ども達がどのような知識獲得の過程を辿って形成されたかを追跡することでもあり、農民・商人層の知識獲得過程の解明は彼らの教養獲得の基礎的な部分の解明に関わる重要な点である。

とりあげる対象は下記の通りである。

(一) 伊勢国飯高郡塚本村に寛政四年（一七九二）～文政五年（一八二二）ころまでの三〇年間ほどの期間に開業された中村佐治右衛門の寺子屋「寿硯堂」での門弟の手習い・読書について―入門帳『寛政四壬子年 門弟衆名前帳 四月朔日』より―

(二) 志摩国答志郡鳥羽大里町に安政二年（一八五五）～明治二十一年（一八八八）ころまでの三〇年間に栗原亮休により開業された寺子屋での学びについて―入門帳『安政二乙卯年 算筆針寺子仕置帳 正月ヨリ 栗原』より―

(三) 伊賀国名張郡築瀬村に天保十五年（一八四四）～明治七年（一八七四）ころまで、中村権平により開業された寺子屋「栄寿堂」の寺入門弟の学びについて―三冊

の『入門帳』より―

(四) 紀州紀ノ川流域の上層農民の家に残された子どもの名前入りの手習い手本による初学の読み書き稽古過程と手本内容の検討

## 【二】民衆教育に関する先行研究について

寺子屋（手習塾）、往来物、私塾などの民衆の子どもの手習い稽古や読書、学問修業に関する先行研究は多岐にわたる。本報告では（一）寺子屋（手習塾）、（二）往来物（三）私塾、（四）識字・リテラシー研究に関する近年の主な成果を中心にのべる。

### （一）寺子屋（手習塾）

・石川謙『日本庶民教育史』一九二九年 一九七二年復刻 玉川大学出版部

・乙竹岩造『日本庶民教育史』一九二九年 上・中・下

巻 目黒書店 復刻は臨川書店

・石島庸男「幕末一寺子屋の展開―真岡田町・精耕堂の事例」上・下

『栃木史論』六号・七号 一九七〇年・一九

七一年、

・入江宏「近世下野農村における手習塾の成立と展開―筆子名寄帳の分析を中心として―」

『栃木県史研究』一三号 一九七七年

・高橋敏「日本民衆教育史研究」一九七九年 未来社

・木村政伸「教育の階層構造と寺子屋の発展―筑後国生葉郡・竹野郡を中心として―」

『地方教育史研究』五号 一九八四年

・高橋敏「近世村落生活文化史序説―上野国原之郷村の研究―」一九九〇年 未来社

・拙著『日本近世民衆教育史研究』一九九一年 梓出版社

・辻本雅史・沖田行司編『教育社会史』（新体系日本史一六）二〇〇二年 山川出版社

寺子屋・手習塾研究は七〇年代を画期として数量的研究から民衆教育の質的研究に転換してきている。そして二〇〇〇年以後は教育・社会史の研究、実態究明など多面的な解明となってきた。石川謙は戦前には寺子屋の源流に関して高橋俊乗と論争し、高橋の中世寺院教育起源説に対して近世寺子屋の多源説を主張し、近世寺子屋が

寺院から脱却して市井の教育として成立発展したことを主張した。また往来物研究にも着手している。一九一五年（大正四）の通信省主催の往来物展示に触発された岡村金太郎による往来物の蒐集と分類の研究に並行して石川も意識的に往来物を蒐集した。往来物は日本社会に散在し、資料的・研究的価値も見いだされないまま消失するに任せられていた。庶民教育史を研究していた石川は往来物を調査蒐集し、庶民教育史の成果を発表していく（『日本庶民教育史』一九二九年）。文部省編『日本教育史資料』（二八九〇〜二八九二年 文部省）をもとに一万五千件にわたる全国的な近世寺子屋の数量的整理と地域ごとの特徴を明らかにした。寺子屋を近世社会に胚胎した商品生産経済を背景に民衆の自主的私的な教育機関として成立してきたという歴史的な性格を明らかにした。また乙竹岩造の教え子の高等師範学校生による寺子屋教育経験者から直接聞き取りがなされ、幕末期の各地の寺子屋の実態をつぶさに提示した。（『日本庶民教育史』一九二九年）戦前の庶民教育史は石川・乙竹の全国的視野からみた数量的な趨勢と直接体験者の聞き取りからみた実態の研究の双方があいまって飛躍的進展を遂げた。戦後

も石川謙は「女子用往来」の研究、「庭訓往来」の分析、「古往来」の研究へと発展させ、さらに石門心学、寺子屋をはじめ郷学、藩校、学問所などの近世の学校諸機関の解明へと進展した。

一九七〇年代以後、R・P・ドーア著『江戸時代の教育』（一九七〇年 岩波書店）、パッシン『日本近代化と教育』（一九六九年 サイマル出版会）、R・ルビンジャー『私塾―近代日本を開いたプライベート・アカデミー―』（一九八一年 サイマル出版会）など教育の近代化論といえる日本の近世社会における教育への積極的な意義付けと評価がなされるという画期的な研究が提示されたが、戦前からの石川謙の研究はまさにそれらに対応する先駆的業績であった。

他方、一九七〇年代以後、教育近代化の潮流を批判的に検討して石島庸男は幕末の堺郷学を分析し、幕末郷学が教化的性格に変容したことを実証した。それと同時に石島は寺子屋が自主的な教育として成長し身分制を打破する可能性をもつことを示唆した。入江宏は近世初期の慈恵の手習塾から幕末期の生業的手習塾へと性格は変化したこと、その画期は寛政期で、門人帳（筆子帳）の成

立がその指標とされるとした。筆者は寛政期の門人帳からその寺子屋の実態をとらえ、民衆の子どもの初学の学びは修了後の年季奉公のための準備教育であり、農民の子どもが農村から出て商人として職能的な訓練を経て自立を達成するまでの苦難の道―多くは挫折してしまうが―のはじまりであることを解明した。また高橋敏は近世社会が無文字社会から「離陸」して文字社会へと転換したことを明らかにし、江戸時代の民衆の識字力研究へとつながっていった。他方、木村政伸は社会史の視点から筑後国の手習塾の内容に謡があることに注目し、村落上層の教養文化を獲得して階層移動をはかる村落の中位階層が手習塾の担い手となったことを解明した。

## (二) 往来物

- ・石川松太郎『往来物の成立と展開』一九八八年 雄松堂出版
- ・天野晴子『女子消息型往来に関する研究』一九九八年 風間書房
- ・八锹友広『近世民衆の教育と政治参加』二〇〇一年 校倉書房
- ・拙著『近世民衆の手習いと往来物』二〇〇二年 梓出

## 版社

往来物の研究は石川謙・松太郎父子により基本的なことが解明されてきた。父子が蒐集した膨大な往来物は謙堂文庫として確立した。また石川謙の往来物分類を継承発展させて石川松太郎『往来物の成立と展開』（一九八八年）が発刊され、『藩校と寺子屋』（一九七八年 教育社歴史新書）も発刊された。石川松太郎『往来物の成立と展開』は近世社会に版本だけでも七千種類に達したとされる往来物の分類とそれぞれの分野の個別の往来物の作者や発刊年、内容の特徴、その変容などが解明された。それらの研究をもとに『往来物大系』全百卷（一九九四年 大空社）、石川松太郎・小泉吉永編『往来物解題辞典』全二卷（二〇〇一年 大空社）なども出された。

天野晴子は『女子消息型往来に関する研究』（一九九八年）において、石川謙・松太郎父子の女子用往来の研究を進展させ、消息型に限定して女子用往来の特徴を抽出した。その結論は、初期の散らし書きや季節を愛でる文、節句を楽しむ風雅な内容が、後期には実用型に転換することを数点の女子消息型往来を精査して結論づけた。また初期の風雅を称賛する女筆から後期には男筆の女子

消息型往来も登場するなど風雅より生活知識をという読者層の需要の変化を抽出した。また八鍬友広は一揆伝承を往来物に残し、子どもの学習テキストとして活用させながら、その後の騒動に生かす取り組みを紹介し、往来物を新たな観点から照射した。また筆者は寺子屋においてどのように往来物が手習い稽古に活用されるのかを実態面から明かにした。そのなかで地理科往来物のうち、各地域の独自の内容を盛り込んだ往来物を「地往来」物と名付けて、地域に根ざして地域の名所・旧跡、歴史遺産を往来物化して社会にひろく伝搬するために版本化されたものと概念化した。そして大和国に出版された「奈良詣」「龍田詣」「南都名所記」などを「地往来」物として位置づけた<sup>9)</sup>。

### (三) 私塾

- ・ R・ルビンジャー 『私塾―近代日本を拓いたプライベート・アカデミー―』一九七九年 サイマル出版(石附実・海原徹訳)
- ・ 海原徹 『近世私塾の研究』一九八三年 思文閣出版
- ・ 木村政伸 『近世地域教育史の研究』二〇〇六年 思文閣出版

私塾とは私的な学問塾であり、身分・職業をこえた学者・知識人の私宅で行われる自由な学問研究の場所である。広瀬瀨窓の私塾「咸宜園」では身分制社会にあつて三奪法など学問の優秀者を能力で評価するなど画期的教育が行われた。近年の木村政伸の研究では九州筑紫地域を対象として知識人の学問内容と交流が地域生活に密着して形成され、相互の交流が頻繁であり相互の紐帯も強いことが実証された。

### (四) 識字・リテラシー

- ・ 八鍬友広 「近世民衆の識字をめぐる諸問題」一九九三年 『日本教育史研究』一二号
- ・ 木村政伸 「近世識字研究における宗盲人別帳の史料的可能性」一九九五年 『日本教育史研究』一四号
- ・ 八鍬友広 「近世社会と識字」 『教育学研究』二〇〇三年 七〇巻四号
- ・ 科研基盤研究(B) (研究代表者 大戸安弘/筑波大学) 共同研究成果報告書『前近代 日本における識字状況に関する基礎的研究』(二〇〇六年)
- ・ リチャード・ルビンジャー著・川村肇訳 『日本人のり

テラシー 一六〇〇〜一九〇〇年 二〇〇八年 柏書房

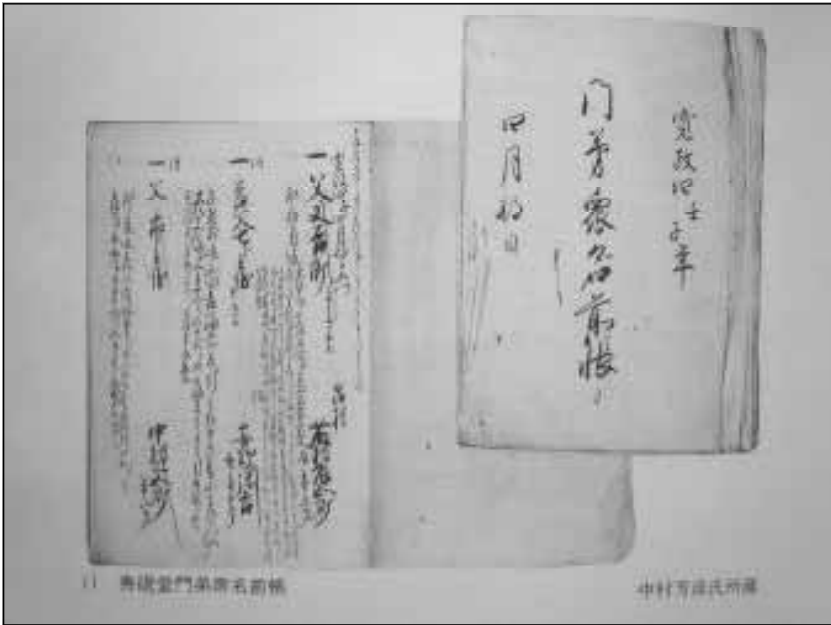
近世社会が文字社会とするならば、近世の民衆層はどれくらいの識字能力を獲得していたのか、またどのように識字力を獲得したのかは重要な課題である。梅原猛や網野善彦のように六〇%の識字力など提言されているが、近年のルビンジャー著『日本人のリテラシー 一六〇〇〜一九〇〇年』では、地域による差違の存在、人や物資の交流、宿場町、城下町など地域ごとの特質と関わって識字力の広がりには平面的な広がりではなく、また均一的でもなくまた模様の様相があることが提示されている。また筆者も参加する科研による共同研究会「識字研究会」では二〇〇六年に科研基盤研究(B)研究成果報告書『前近代日本における識字状況に関する基礎的研究』<sup>2)</sup>を発刊し、さらに「日本におけるリテラシーの歴史的形成過程」と『学び』の変容に関する実証的研究」と継続されている。識字研究では日本における読み書き計算力が民衆世界に浸透するのはいつ頃から、どのような過程を経てどのようにひろがっていくのかについて農民の自署花押の形態や自署率から検討してきた。農民の花押自署状況は

農村、商業地域により異なる。また宗門帳では女性の花押自署の事例もみられるなど識字研究をめぐる個別研究と方法的な検討課題は大きい。

## 【二】民衆教育Ⅱ寺子屋の事例研究と往来物

〔一〕伊勢国飯高郡塚本村 中村佐治右衛門寺子屋「寿硯堂」の事例——門人帳『寛政四壬子年 門弟衆名前帳 四月朔日』を中心として——

(一) 中村佐治右衛門寺子屋「寿硯堂」について 寺子屋「寿硯堂」には入門帳がある<sup>3)</sup>。「寿硯堂」は寛政四年(一七七二)から文政五年(一八二二)までの三一年間、伊勢国飯高郡塚本村に開業された寺子屋である。門弟の子どもは男子四七八人、女子一六五人あわせて六四三人である。ほぼ毎年二〇人以上の門弟が入門したが、多いときは三九人(文化十一年)、少ないときは三人(寛政七年)という入門数には変動があった。入門した門弟はほぼ五年以内、平均して二〜三年の修学期間であったので、「寿硯堂」には毎年、常時五〇〜六〇人の門弟が学



『三重県史 資料編近世5』口絵より転載

んでいたことになり、賑わいのある手習い稽古所であった。そして文化期には門弟の数も八〇人ほどに達するほどであった。

「寿硯堂」の特徴について第一は伊勢国の南部一帯の比較的広域にわたる地域から門弟が入門している。紀州藩領内に属する松坂、一志郡、飯南郡内の二七ヶ町村から農商人の子どもが入門している。最も門弟が多かったのは「寿硯堂」所在地の塚本村であるが、隣村の船江村、近隣の上之庄村などとともに伊勢寺村、片野村など遠隔地の村からの入門もある。門弟の多くは七く九才に入門して初学入門期の手習いなどの稽古に励んだが、なかには一〇才以上から二〇才台の青年も入門している。初学の手習いは地元の村で既に修学したが、再度「寿硯堂」に入門して高度の知識を獲得したと推定される。

第二に「寿硯堂」に入門した門弟は村の農民層のうち村方役人を含む上層、中層、田畑所有高が三反未満層あるいは無高といった零細層までにも広がっていた。近世教育史研究の通説とされた寺子屋入門階層は六反以上の中層以上という通説とは異なり、さらに広い階層に深く広がっている。寺子屋の社会基盤は全階層といえる事が



明らかとなった。

第三は門人帳に記載された子どもの情報は詳細であり、子どもの入門年月、入門時の年齢、子どもの出身町村名、父親名、修了年、教授の内容、修了後のライフコースともいえる子どもの生涯にわたる軌跡が記されている。子どもにより情報は詳細なものと簡単な記述しかないなど様々であるが、塚本村の男子門弟のうち二五%、男児入門者全体の三二%は修了の後に京都や江戸、大坂方面に年季奉公にでている。それを可能にしたのは松坂に本家を構え、三都に大店をもつ三井家、長谷川家などの豪商・伊勢商人の存在であり地縁による奉公人供給ルートが存在していた。どのようにして年季奉公人として三都の大店に送られたのかは、たとえば三井家の事例では本家と結ぶ塚本村の村役人と寺子屋師匠の中村佐右衛門が幹旋役を担い、まずは松坂の本家に門弟を送り出し、挨拶と本家からの饗応をうけて江戸、京都、大坂の大店に振り分けられ、迎えの手代に一〇人ほどずつまとめて連れられて江戸などに送り出された。このように寺子屋師匠と村役人から年季奉公人として送り出されたひとりひとりの子どもについて奉公先も判明している。寺子屋修

学の後にはどのような店に奉公し、その店で半元服をむかえ、「登り制度」という奉公人の器量を見極める制度―それは三井家であれば七年を画期として一旦雇傭を解除し子どもを郷里へ返し、少しの休暇を与え、器量ある者には再度の雇傭を行うという振り分けの制度―を通過した後には手代に昇進させる。この過程を四回まで繰り返すが、順調な昇進をするものは少数であり途中で病気にかかり帰郷するものも少なくない。あるいは奉公後に挫折して出奔し行方知れずになった者もいる。そのように「寿硯堂」での学習後のかなり詳細な情報を寺子屋師匠中村佐治右衛門はとらえて門人帳に子どもひとりひとりについて書き込んでいる。その情報は三井家の情報と合致する面もあり確かさもある。その内容は近世後期の伊勢国農村の子どもが辿った人生の軌跡をも示している。また近世の子どものライフコースを具体的に提示している。特筆できることは、奉公に出て郷里に帰ってきた門弟を、再度、他の奉公先に幹旋していることである<sup>(4)</sup>。時には新たな奉公先に村役人が随伴している場合もあった。この情報が詳細であるのは地域の「寿硯堂」への関心の高さ、村役人の幹旋、推薦、同行の事実から私的寺子屋であり

ながら伊勢の豪商と村役人の連携があり農村の子どもをサボートしていたことである。

第四に「寿硯堂」修了後の門弟の行動軌跡は男子、女子では差違があつた。奉公に出た男子の門弟は伊勢商人の地縁ルートを通り、江戸、大坂、京都の本店に奉公した者が多かつた。しかし近隣の小商いの商家への奉公も存在した。それに対して女子の奉公人は少なかつたが、町方奉公、子守奉公など近村に奉公した。また奉公に出かない子どもは家業を継ぐ、あるいは養子・養女の縁組みで郷里を離れた。とりわけ女子の場合、結婚して出産、出産と子ども数、難産による死去など情報は詳細である。これは比較的女子が「寿硯堂」のある塚本村の近隣に縁づいており、師匠による情報が入手されやすかつたからであろう。

### (二) 寺子屋師匠、中村佐治右衛門について

塚本村の中村家は紀州藩地土とされる。しかし紀州藩地土名簿である幕末期の地土史料には中村家の名はない。地土とは紀州藩が近世初期に行った制度である郷土制度ともいえる。太閤検地以後、豪族を農村に土着化させ村落内の特権を付与した。彼らは領内の各村に一く二軒存

在した村の名望家の家柄として多くは大庄屋あるいは庄屋、村役人に任じた。幕末には地土株を所持し、藩への多額の献金を求められ、地土株の売買も行われた。地土は村の知識層・指導層である。寺子屋開業の可能性は十分にあり。

### (三) 門弟の年季奉公について

男子門弟が奉公した三井の本店の実態をみてみる。およそ門弟は一二才までには修学を終え、一三才には奉公に出た。まず、三井店は江戸の四つの店に割り振られて奉公した。子供衆とされる新参者が三年間は店の使い走り、下足番、店先の掃除、奥向きの用事などの仕事をす。その過程で先輩の手代の見習いをする。奉公後に半元服、改名などがなされる。ほぼ七年ほどして「登り(下り)」制度を経験する。初登りと称して奉公人は一旦郷里に戻される。商売に器量のある者にはのみ再度声がかかり、もとの店に雇傭される。そのときに手代に昇格する。手代は商売を担う戦力であり、手代時代に商品の扱い、客の対応、集金、仕入れなどあらゆる業務を体で覚える。さらに七年後には二度登り、さらに七年後には三度登り、さらに七年後に四度登りがなされる。四度登りを経験し

た奉公人は入店後二八年を経過し店の支配役に昇格する。三井越後屋の奉公人の研究には三井文庫史料をもとにした西坂靖『三井越後屋奉公人の研究』<sup>(5)</sup>、三井文庫編『三井事業史』<sup>(6)</sup>が詳しい。教育史から注目できることは奉公人の器量を高めるための店則制定、若年の奉公人は奉公後の数年間は夜間に先輩の手代から改めて読み書き計算を学習し、器量を高める努力を業務として強制され、将来の出世を奨励されて激しい競争にさらされていることである。当然、競争からの脱落があり、「敗北」を伴う。病気であったり、店をやめる、あるいは出奔など奉公人が一人前の商人の器量を獲得するのは甚だ困難を伴う。しかし近世の子どものが農業以外の稼業を獲得する可能性をもたらししたものともいえる。また病気の多さは特筆される。

#### (四) 門弟のライフコースについて

男子門弟四七八人のライフコースをみると、修学期間は女子よりやや長く三〜五年ほどであった。修学内容は孟子素読、手習い、夜間手習い手本、夜算術、算学、算筆、請書稽古、久居の儒者佐野嘉兵衛に入門、四書・手習い、殿町堀木氏に五経・文選入門、魚町白堅助人に手

跡入門、夜手習い、四書読書、大学素読、夜習、算盤、読書入門、算術稽古、手習い・読物などが記述されている。初学のみならず四書五経の読書、昼間のみならず夜間も算術稽古がなされ、修了後近くの儒者に入門して儒学をさらに修得している者もいた。それらの修学はほぼ一才には修了している。その後奉公に出る者も少なくない。養子縁組も少なくないが離縁率が高い。

主な奉公先は別表(一)にあるように江戸新材木町長井店「嶋屋」、江戸浅草見付嶋屋、江戸麹町「岩城升屋」、江戸尾張町「蛭子屋」、江戸三田荒木ノ店、江戸伝馬町長谷川店、江戸本町長谷川店、三井本店、大坂三井店、江戸尾張町亀屋、江戸駿河町三井向店、江戸尾張町「布袋や」、京都蛭子屋などである。地元では下之庄村箸や、松ヶ崎酒屋、魚町椀や、伊賀町蝟燭や、葉王寺村もめんや、白粉町ぬしや店などがあげられている。おもに江戸、大坂、京都の三井店、長谷川店、長井店、松坂の豪商小津店、大丸、松坂やなど大店である。他方、近所の村の商店、箸屋、紺屋、椀屋、もめん屋などにも奉公した。また元服、改名、結婚、死去など通過儀礼は書かれているが、死去年齢は四〇〜五〇才台が多いが二〇才台や三〇才台

の死去も少なくない<sup>7)</sup>。病気のものも奉公者に多い。

女子のライフコースをみると、修学期間が二年〜三年なかには一年未満のものが少なくない。男子より短い。修了後は奉公にできるものもいるが、おおくは縁組み、出産そして離縁するものも少なくない。奉公先は別表の通り、舟江村、川井町、松坂、山田、射和村、曲村、曾原村、美濃田村など近郊の町村であり、桶屋、茶屋奉公、仕立て屋、町方奉公、子守などである。縁組みした年齢は一六才から二四才ころといえる。一二才や一五才の養女縁組のものもあった。出産は男女児一人から二人であり、なかには難産で死去したり、「拾い親」の儀礼を試みているものもいた。子ども時代に疮瘡に罹ったものは五人で、死去した者もいた。次いで眼病が多かった。

### (五) 門弟の識字力

男子は年季奉公に出るものが比較的多く、初歩的な読み・書き・算術に留まらず、四書五経、大学、文選の素読、算盤、手跡とあり、高度な内容を習う門弟もあった<sup>8)</sup>。門弟は修了後の奉公先が三都の本店ということもあり、相当に精進して器量を形成していたと推定される。女子も奉公が子守、町方奉公、近所の商家であつても読み書

きは習つておくべきと認識されていた。身分制社会にあつても農民以外の商人、職人の稼業で生きることが可能な社会となり、苛酷ではあつたが励みともなつた。また「寿硯堂」の教授方法を伺える内容として「いろは」の仮名の初歩、その後真名つまり漢字稽古へと進ませる。それには「通い手本」を与える場合もあり、「商売往来」を清書させている。また初学として「いろは」より「町名」「在名」「童子方鑑」を読ませている記述もあり、初学の手本の手習い、漢籍書の読書、教訓類往来物の読書をさせたり、女子には国学者本居大平の門人であり門弟の父親の曾根代五郎の歌を手本にして稽古させている<sup>9)</sup>。

### (六) まとめ

「寿硯堂」の事例では、初学入門期の仮名の手習い稽古や算術の稽古がなされているが、寺子屋修了後の年季奉公を視野に入れた算術や算盤、請書の書き方の稽古、手跡稽古もなされている。また四書・五経をはじめ大学・文選など漢籍書の素読もなされていた。さらに寺子屋修了後に松坂・久居にある儒者の学問塾に入門するなど、「寿硯堂」が初学入門期の学習のみならず、専門的な教養形成のために子ども達が入門していたことが伺える。

また女兒の事例をみると修了後に子守や屋敷奉公、小商店の奉公、あるいは婚姻でも手習い、算術は修得しておくべき事であった。読み書き算術は一二才ころまでに少なくとも修得しておくべきものという認識が共有されていた。

## 〔二〕 志摩国答志郡鳥羽大里町、栗原亮休寺子屋

—— 門人帳 『安政二乙卯年 算筆針寺子屋置帳』

正月ヨリ 栗原 などをとに ——

### (一) 栗原家寺子屋の概要と師匠

栗原家寺子屋は幕末鳥羽藩稲垣家の家中の下級士族である栗原家親子二代にわたる寺子屋経営である。門人帳は栗原亮休(勇蔵)の父、元平(経廣)が開業した寺子屋の天保十一年から天保十五年までの門弟の記録「手習人名」が一冊ある。男子門弟二十九人、女子門弟一七人あわせて四六人であり、家中の同階層の男女の子どもと大里町近辺の町人の男女の子どもが集まって同席して学習している。

二代目の栗原亮休が父の門弟を受け継いで、安政二年より明治二十一年ころまで寺子屋を開業した。門人帳『安

政二乙卯年 算筆針寺子屋置帳 正月ヨリ 栗原(上笠一郎氏所蔵)が一冊ある。この門人帳には栗原寺子屋では安政元年より明治二十一年まで手習い、針妙、素読、算術の内容を門弟の自由な選択により組み合わせて習わせていた。その概要は開業期間三四年間ほどで、手習いを習った者は男子一二人、女子五五人、合わせて一六七人、針妙は女子八一人、素読は男子一二人、算術は男子一四〇人、女子六八人、不明者一人で二〇九人であり、算術を習った門弟の比率が高い。男子は手習いと算術、女子は手習い、針妙、算術を組み合わせて習ったと推定できる。城下町寺子屋である栗原寺子屋では幕末期に手習い、針妙、読書、算術をあわせて修得していたこと、とくに算術を習う門弟が多かったのが特徴である。入門年齢は七才より一二才ころが多く、九才入門者が最も多かった。入門期間は四年以下、とくに女子門弟は二年未満が多かった。算術については『国崎村生徒算術稽古帳』(明治八年)にも亮休の門弟名簿が残され、村の大多数の青年に当たる三六人の青年に教えている。

### (二) 個人の学習内容と学習過程の解明

栗原家史料には栗原家寺子屋における様々な教授内容

と過程がわかる史料がある。『慶應二丙寅年手本習数帳  
卯月吉祥日 栗原』には手習い子一一〇人のひとりずつ  
に師匠から授けた手本が記されている、それらをまとめ  
ると栗原寺子屋では入門した門弟が習った内容に共通の  
内容がみられる。つまり「仮名」「文章」「人名」「村名」  
「五十三次（駅）」「国盡」の内容は大多数の門弟が習い、  
続いて「商売往来」「消息往来」は多くの子どもが習った。  
これらは初学入門期の学習内容でもあり、各地域に開設  
された寺子屋の教授内容とも共通している。それらを修  
得した後には各人の好み、師匠の判断によりさらに種々  
の稽古手本が宛がわれた。たとえば男児の「館野豊之助」  
は「文章」を二回、「村名、五十三次、国盡」の初学入門  
期の手習い稽古のあとに、「手習訓」「武器短歌」「自遣往  
来」「京内詣」「庭訓往来」「江府御門盡」など一二冊を稽  
古している。「自遣往来」は「江戸往来」であり江戸の名  
所廻り、「京内詣」は京都の名所旧跡めぐり記であり地理  
科教材である。また「庭訓往来」は上流の武家生活を彷彿  
とさせる風雅な四季折々の一年にわたる正月から十二  
月まで月ごとの往返一対の消息文雛形である。これらは  
伝統的な消息科教材に当たる。そして「手習訓」は手習

いの意味を論じた教訓論であり教訓科教材である。他方、  
「木下恒吉」は「仮名・文章・人名・村名・五十三次・  
国盡・家名・商売往来・消息往来・千字文」など一〇冊  
を学んでいる。初学の単語科教材と商売往来のもつ実業  
科教材、そして手紙文の稽古にあたる消息科教材など近  
世民衆子弟の典型的な学びである。総じて言えば男児は  
初学の手習い手本「仮名・文章・人名・村名・五十三次  
・国盡」に続いて「商売往来」「消息往来」と教訓的内容  
をもつ「寺子教訓書」などをよく学んでいたといえる。  
これらの手本を四〜五年で修得したのである。

では女兒の場合はどうか。女兒もまた初学入  
門期の手本である「仮名、文章、人名、村名、五十三次  
（駅）」に続いて各種の女子用往来が与えられている。と  
くに「女子三習」が最も好まれていた。「女子三習」の内  
容は読書・手習い・裁縫の三種の習いであり家政的教材  
である<sup>10</sup>。また「女今川」「女消息往来」など女子の教訓  
的教材と女子用の手紙文雛形にあたる消息文の稽古がよく  
行われた。それに加えて「雑用」があげられ、実際に  
寺子屋師匠の家や自分の家においての掃除、洗濯などの  
手伝いも行わせた。それらは女子門弟の生活準備であつ

た。たとえば最も多く手本を習った「宮本糸い」は「仮名・文章・人名・村名・五十三次」に続いて「世界国盡・百千鳥・四季仮名文・男文章・女商売往来」を学んでいる。また師匠栗原亮休の娘である「栗原くす」は「仮名・文章・村名・五十三次・国盡・女消息往来」である。また、「木下こと」は「仮名・文章・人名・村名・五十三次・国盡・女子三習・世界国盡・女商売往来」であり、初学に続いて女子用教材が多い。それらを一年く二年ほどで習ったのである。総じて見れば男児・女児ともに学習順序では「仮名、文章、人名、村名、五十三次（駅名）、国盡」などの単語と用文章の稽古をすませて男児は「商売往来・消息往来」へと続き、女児は「女子三習・女今川・女商売往来」へと進んだ。およそ五く七冊ほどの手本を学んでいるのである。

### (三) 『年々双紙習教』からみた手習い稽古量

栗原家の寺子屋関係文書には安政三年（一八五六）から慶応三年（一八六七）まで（但し文久三・一八六三年は欠落）のおよそ一〇年間ほどの『年々双紙習教』の史料がある。内容は師匠が門弟に購入させた手習い稽古用の双紙の代金と購入した門弟の名前の控えである。年間

に門弟が購入した双紙の総数が判明する。購入された双紙数はひとりあたりにして莫大な量に達していた。ピークは文久二年（一八六二）で一人二五四三帖、次いで慶応元年（一八六五）の二〇八六帖、少ない時期は安政三年（一八五六）の三一八帖、次いで安政四年八七〇帖であった。これはひとり一ヶ月では二一〜二六帖、一日の門弟購入双紙数にすると七帖〜一帖弱であった。これらは双紙購入数であり、実際の消費数、稽古により消耗した数字ではない。しかし均せばおよそ四帖であり、一帖として綴じ込まれた半紙は二〇枚とされることから、平均八〇枚ほどの半紙消費数量となる。これはひとつの目安である。<sup>(1)</sup>

### (四) 栗原家寺子屋の学習定座と束脩・謝儀の実態

門弟は士族子弟、町人子弟も同じ場所で行き合せて席をとり、男子・女子も同じ場所で行き合せて席をうけた。「定座」で見ると、師匠からみて向かいに士族子弟の男子同士の向かい合わせ、町人の女子が向かい合わせで真ん中を占めている。町人の男子は教場の周辺に全体を囲む形で席を占めている。士族と町人の子どもが隔てなく学ぶことは双方にとっても身分的隔たりを小さ

くし、知的刺激にもなつたであらう。

束脩は入門料であり鳥羽の鮭、鯖、すばしりなどの魚介類と昆布、のりなどの海産物、風呂敷、雪駄、手ぬぐいなどの日用品、美濃紙、半紙などの文房具、かぼちゃ、なすび、牛蒡などの野菜、砂糖、酒などの嗜好品、みかん、すいか、果物など九三種類の品目が贈答された。種類・品目の多さは群を抜くが、師匠と門弟、師匠と親との親密な関係が伺われる。また謝儀は月謝であり、明治以前は五匁く八匁、明治以後は一二錢五厘く二五錢などが多かった。金銭のみならず束脩・謝儀に生活必需品が贈与された。

### (五) まとめ

栗原家寺子屋の事例からいえることは、幕末期になると、学びの内容に共通性が出てきている。「仮名」「文章」「人名」「村名」「五十三次(駅)」「国盡」が殆どの入門生に共通して学ばれ、次いで男児では「商売往来」「消息往来」、女児では「女子三習」「女今川」「女商売往来」が学ばれる。また場合によっては男児は「自遣往来」「寺子教訓書」「庭訓往来」女児は「女消息往来」「四季仮名文」など学ばれた。このように単語類、教訓的教材、用文章、

手紙文などの初学の教材や日用文・手紙文など消息科教材を学び、また実用のみならず和歌や日常生活の処し方、寺子屋で手習いする意義や処世訓を「寺子教訓書」をもとに学んだり、「庭訓往来」で風雅の世界を垣間見る手紙文の稽古を庶民の日常生活の中でなされていたことは注目できる。

### 「三」伊賀国名張郡築瀬村、中村権平寺子屋「栄寿堂」

——三冊の『入門帳』をもとに——

(一) 伊賀国名張郡築瀬村の地域的な特徴について  
寺子屋「栄寿堂」が開業された伊賀国名張郡築瀬村について、地域の概況を「明治五年十一月 伊賀国名張郡各村明細帳」(名張市史編纂室所蔵)からみとめる。名張郡内各村四四ヶ村のうち、近世では築瀬村と称し、村高は『宗国史』(二七五一年)では五〇一・七四六石、内、田高は一九五・四〇二四石、内、畑高一〇三・九〇五八石とされ、田畑耕作からの収穫高は郡内一四位で中堅的位置にある。しかし『天保郷帳』(一八三四年)では一六九二・六五三石と発展し、人口は二六九三人(男子一三二七人、女子一三六六人)、家数七三三軒と郡内では人口、



家数ともに突出して多い<sup>(2)</sup>。郡内で唯一築瀬村が町方として発展した。名張郡各村の職人・日用稼ぎ人では職人四人（瓦屋薰元、背地瓦屋、左官、桶屋、木挽含む）、医師三人、酒造稼七人、醬油造九人、鍛冶職三六人、鋳物師一人、紺屋一人、油絞一人、地車一五輪、渡場一人、渡船一人であり築瀬村には職人が多く流入してきている。

また寺院宗派別では真言宗門徒が八割以上を占め、天台宗、大念仏宗、浄土宗、禪宗が点在している。そのなかで築瀬村のみ浄土宗、一向宗東本願寺、法華宗、大念仏宗の寺院がある。他国流入者が多いことから、宗派も多様である。伊勢国地域の農村は浄土真宗門徒（高田本山もある）が多い地域の状況であるが、伊賀国名張郡築瀬村では一向宗が専称寺だけであり宗派別では異なった分布を示している。

農民・庶民の農間稼ぎをみても築瀬村の男子は商売、女子は糸延稼ぎとあり、郡内農村の男女の稼ぎが男は山稼ぎ、紙漉稼ぎ、日雇い山稼ぎ、女は糸延べ、木綿織り稼ぎをするものが圧倒的に多いなかで築瀬村のみ男が商売、女は糸延べで農間稼ぎをしている。また築瀬村は多くの職人が暮らしを立て、商売を商う町である。また名張藤

堂藩の領地として藤堂家の屋敷をもつ。

## (二) 寺子屋「栄寿堂」師匠、中村権平について

中村権平は文化四年（一八〇七）に名張郡築瀬村に出生した。生育過程は判明しないが、天保十四年（一八四三）権平が三六才の時に寺子屋「栄寿堂」を開業している。この年までに権平は名張藤堂藩で藩主以下家中で盛んになっていた金剛流能楽の芸事稽古にも精進し、謡、踊りの師範格となり、文久二年『名張藩分限帳』によれば一代限りの「中小姓格席」で「二人扶持 五俵」の「御近習」の身分である。権平の養嗣子中村左橋は医師であり、同年の分限帳では「御徒士格」「無席列座」とあり、親子揃って芸事・学問で家中の末席に位置づけられた。芸事師匠としては『乱舞入門控 栄寿堂』<sup>(13)</sup>が一冊あり、芸事の門弟一二人は名張藤堂藩家中の者、名張の町方の商人、大和国山辺郡や吉野郡、伊賀上野などの職人、商人層など近畿圏内から門弟が入門していた。謡の教本（松風、葵上、紅葉狩り）なども多数残されている。また『南都御祭礼新能』（安政二年）の書物、奈良町の春日大社の若宮神社の「御まつり」では金剛流能楽の謡手でもある。このように謡教本を多数所蔵しているのみならず、

往来物を一〇〇点ほど所蔵して近所の子どもの手習い・読書・十露盤による算術教授も行った。さらに四書・五経などの漢籍書や『会玉編 大全』七冊、『日本外史』一五冊と二二冊の二揃え、『国史略』五冊、『十八史略』六冊、『北国太平記』明治期の『文典初歩』『文章規範』『訳文須知』などを所蔵し、漢籍書には「本主 中村権平」とある。謡教本、往来物、漢籍書と歴史書など積極的に活用されたようである。権平の養嗣子は医師であり『傷寒論』などの医書も多数あり、総計七〇九点が所蔵されている。

(三) 入門帳にみる寺子屋「栄寿堂」と師匠中村権平  
寺子屋入門帳は三冊ある。<sup>14)</sup>

A 『天保十四年癸卯 入門帳 正月吉祥日』 一冊  
B 『天保十五年甲辰 謡十露盤入門牒』 一冊  
C 『慶応三丁卯年 入門帳 夷則吉祥日』 一冊  
Aの入門帳には天保十四年(一八四三)一月十日く弘化四年(一七四七)八月五日までの五年間に寺入りした子どもの名前、入門年月日、性別、親の名前、村名、屋号、束脩、その数量などが一筆毎に記録されている。全部で一九三人(内男児一四四人、女児四九人)で男児が七五%、女子二五%であった。寺入りした子どもは瀬古

口村、中村、黒田村など、名張の町方と伊勢神宮に向かう参宮街道筋の村々からの子どもが入門が多かった。

Bは天保十五年(一八四四)から嘉永二年(二八四九)までの五年間に五九筆七六人の入門者があった。手習いと並行して謡、十露盤、素踊りが教えられ、門弟には大人も子どもも混じって学んでいた。稽古内容は謡のみ、十露盤のみ、謡と十露盤の双方、謡と素踊りの双方、謡方のみなど多様な選択があった。謡八人、十露盤一四人、謡・十露盤双方六人、謡・素踊り双方は一人、謡方一人、不明三二人であった。

Cは慶応三年(一八六七)から明治七年(一八七四)までの八年間の入門者三一三人(男子二二人、女子九二人)であり、男児七一%、女児二九%であった。

中村権平寺子屋は名張町方と町に近い街道筋農村の子ども達を集めて、謡と素踊り芸事教授の合間に手習い、算盤も教えた。

#### (四) 寺子屋「栄寿堂」の手習い稽古と往来物

中村権平は子ども達の手習い稽古に、往来物を手本として自筆した文字を子どもに与え稽古させた。往来物は一〇〇冊ほど残され、単語類や実業類など各ジャンルに

わたり広く集められ、よく流布した往来物が活用されている。女子用往来が多く集められ、単語類は初学として一般化している内容である。往来物を内容別に分類すれば下記の通りである。

単語類—単語、家名、在名、苗字尽、小野篁歌字尽、百官名

実業類—商売往来、百姓往来、商人取引

歴史類—腰越状、熊谷状、弁慶状、合状并曾我状、御成敗式目講釈、今川絵抄、大坂状、義経合状

地理類—富士往来、風俗往来、自遣往来

教訓類—童子教、実語教、庭訓講釈、初登山教訓書

女子用往来—七小町文庫（仮名文字、女筆散らし書き

手本）、童女筆海智恵鏡（女用用文章、女筆散らし書き、

女中教訓条々）、小倉百人一首、女中婦ミ探、文章（女用

文章）消息短歌、短歌、四季女文章、女用文章、女大学、

女実語教、吉書、女今川、女文章、女庭訓御所文庫、京

内詣、書始詩歌控

その他—長恨歌新鈔、和漢朗詠集、年中行事曆指南、

日本廣村并礼式、武具短歌、戸田文章、前訓、命の親

「栄寿堂」の場合、文字稽古を通して、実学より芸事

・教養として修得させた。

#### （五）中村権平寺子屋「栄寿堂」のまとめ

中村権平寺子屋「栄寿堂」の事例から、手習いや十露盤の稽古は踊りや謡などの芸事の一環として理解されていた。師匠が芸事師匠でもあり、門弟は大人や子どもが、師匠から手習い手本を与えられ、何度も稽古して修得したのは踊りや謡の場合と共通していた。師匠が手本を示して往来物や教本をもとに門弟は文字や謡を稽古し、踊りも同様に師匠が手本を示して稽古が重ねられたと推測できる。中村権平は師匠として教えることに熱意があり、書物や往来物の研究に熱心であった。

〔四〕近世後期、紀州紀ノ川流域の上層農民の子ども達の学び——名前入り手本からみた手習い過程と内容——

（一）文化・文政期以後、上層農民の子どもの手習い手本と稽古過程

近世後期、とりわけ文化・文政期ころより農民家族において子どもの存在が重要視され、後継者として意識的に教育することがはじまる。紀州伊都郡赤塚村田中家の子ども名が記された手本は八人（男児・女児）、手本一冊

ごとに子どもの名前が記載され、子どもひとりにつき少なくとも五〜六冊以上の手本が残されており手習い過程が判明する。子どもの手習い過程は以下のように整理されよう。<sup>(15)</sup>

### A 文化期（二八〇四〜一八一七）の子ども

女兒、喜美枝には「文化二年 御手本 村名」が残され、地名による単語稽古本がある。

男児、兵吉郎は文化四年（二八〇七）三月に「商売往来」を習い始め、文化六年（二八〇九）には「御成敗式目」を学習している。「商売往来」「御成敗式目」は初学の中級教材とも言える内容である。「商売往来」は商売に関する単語が読み書きできることであり、人生訓もあわせて学ぶ。「御成敗式目」は武家政権成立後にはじめて武家の立場から相論を成敗する条目が制定されたものでありテキストとして流布していたものを、庶民の子どもが武家の子どもの学習教材を手本として学んだ。

### B 文政期（二八一八〜一八二九年）の子ども達

・ 女兒、鹿野（志賀野、鹿能、お鹿）の学び

文政元年〜二年（二八一八〜一八一九）ころ出生。手習い稽古はじめは文政八年（二八二五）であり、以下の

手本内容を習っていく。

文政八年（一八二五）「手本」——いろは 一二三、石斗升合など。

文政九年（一八二六）「御手本」——人名頭字〓源、平、藤、吉、長、久、蔵など

文政九年「御手本」——村名覚。郡内の地名を単語学習として手本化。

文政九年「お手本」——用文章「取込御無音申二候」などの二行の短文。

文政十年（一八二七）「商売往来」——商売の用語、金子、雑穀、絹布の類、仕立物、染色、武士之用具、唐物和物の家財、葉種香具、山海の魚鳥、芸事と趣味、日常生活の教訓など単語と名称、教訓。

文政十一年（一八二八）「年中往来」——年を通した月ごとの消息文を正月から十二月まで四季に合わせた消息文雛型をあつめたもの。歓待文、招待文、贈答札文、祝儀文などが含まれる。

文政期「龍田詣」——大和名所廻りを単語及び地理内容の  
手本。

文政期「和歌浦名所」——和歌浦名所廻りの地理内容。

天保八年（一八三七）「嵯峨、吉野山桜」―女子用往来。祝儀文とりわけ出産祝、婚 礼祝、元服祝などの祝儀文雛型。

手本「年中往来」と人名頭字、村名覚の「御手本」は書家上田傳右衛門筆の手本、用文章の「お手本」「御手本」は駒次郎基貞筆の手本とある。女兒鹿能は文政十年より近所の手習い師匠、上田傳右衛門に稽古をうけていた。

その後、天保六年（一八三七）正月より十月まで、行儀裁縫見習いのため和歌山藩能役者、松井市大夫の武家屋敷に見習い奉公。それらを終えた後、天保六年に助三郎の末子である幾三郎に嫁入りした。

・男児、福蔵の学び

文政四年（一八二二）ころ出生。習った手本は以下のようである。

文政十二年（一八二九）「手本」二冊―平仮名、人名頭字、村名覚、用文章、

文政十三年（一八三〇）「村名帳」「証文帖」―村名、証文雛型による実用的証文の稽古。

これ以後の手本は欠落している。

・男児、徳次郎（徳二良）の学び

文政八年（一八二五）ころ出生。手習い稽古過程は以下のようである。

年代不明「手本」―いろは、イロハ、覚には日用文章の短文

天保四年（一八三三）「御手本」―人名頭字、源平藤吉などの定型的内容

天保六年（一八三五）「村名帖」―村名手本

年代不明「当用世話字尽」―単語・熟語稽古

天保七年（一八三六）「年中往来」―四季を通じた正月〜十二月までの消息文

天保八年（一八三七）「用文章」―正月から六月までの文章、消息文、「東百官」

「用文章」は馬場村の恩地幾助書とある。徳次郎の稽古反故紙が多く残されている。

C 天保・嘉永・安政期（一八三〇〜一八五九）の子ども達  
・女児、くま（く満、久満、熊）の学び

天保元年（一八三〇）ころ出生か。

年代不明「手本」―いろは、一二三など短文と用文章  
天保八年（一八三七）「御手本」―短文用文章、かしく、

おわんぬを含む女筆文

年代不明「手本」―用文章短文、かな手本など

天保八年（一八三七）「村名尽」―「村名帖」と同じ内容の手本

天保九年（一八三八）「和歌浦名尽」―和歌浦名所廻り文

天保十二年（一八四二）春「商売往来」―「商売往来」の全文と和歌

天保十二年三月「口寝文章」―龍田詣、和歌

・男児、猪三郎の学び

弘化三年（一八四六）ころ出生。初学の仮名の手本は残されていない。

年代不明「国尽、異国名尽、御手本、借用本銀返証文」「奉公人請状」―年代不明の国名、街道名、借用証文雛型、奉公人請状雛型などの用文章

安政二年（一八五五）「商売往来」―一部欠落がある。

猪三郎は慶応二年十一月から同三年四月までの五ヶ月間、高野寺領の恩地幾助に漢籍書の教授をうけ、また明治四年八月から同五年三月までの七ヶ月間、和州宇智郡上野村の漢学者桂岡照景に『大学』・『論語』の講義を受けている。

・女兒、津多恵（蔦江）の学び

―出生は嘉永元年（一八四八）ころ、初学の手習い稽古はじめは嘉永六年（一八五三）六才ころ、十才ころに学び終えて、四年間手習い稽古を行った。手本は「いろは」から始まり、人名頭字・漢字熟語、「村名帖」、「商売往来」を稽古して最後に「和歌浦名所」を手習いした。典型的な初学の学習といえる。

嘉永六年（一八五三）七月「御手本」―いろは、数字一二三、片仮名、平かなくずし

安政二年（一八五五）「手本」―いろはに、一三三四、用文章短文

安政三年（一八五六）「御手本」―人名頭字（源平藤吉）漢字熟語・用文章

年代不明「表題不明」―短文用文章  
安政五年（一八五八）正月「村名帖」―村名づくしで

地理・単語の手本

安政五年「和歌浦名所・商売往来」―本文は商売往来の初めから鉄・象眼まで

安政五年「村名帖・和歌浦名所」―本文は和歌浦名所めぐりのみ。地理科手本

・男児、熊次郎の学び

嘉永四年（一八五二）ころ出生。安政六年（一八五九）の八才ころが手習い稽古はじめである。稽古内容は以下のようなものである。

安政六年（一八五九）「手本」——いろはに、一二三四、短文

年代不明「片仮名」——片仮名イロハニホ

安政六年「手本」——短文、日用文など初歩の短文用文章

章

万延元年（一八六〇）「村名、借用証文帖」——地名、用文章、証文雛型

年代不明「新今川」——「新今川童子教訓条々」ではじまる男児教訓的内容手本。

「新今川」とは「女今川」が女子用教訓書とすれば「新今川」は男子用教訓書。作者は判明しないが宝暦十年（一七六〇）大坂の鳥飼源十郎刊とされる<sup>(6)</sup>。武家家訓「今川状」の改編版である。

D 明治期の子ども

・女児、富野（登美野、登美乃、登美農、とみの、トミノ）の学び

出生は明治四年（一八七一）ころ。明治期の学校に就学する。しかし伝統的な手習い稽古手本をもとに学習している。家庭での稽古は、いろは、村名、国名、地名・人名頭字、日用証文類雛型、商売往来であり、とくに日用文章の稽古が多かった。

明治十二年（一八七九）『小学読本 卷之巻』——いろはの順序で説明文

年代不明『郵名手本』——『郵名尽』と同じ。単語と地理教材。

年代不明『国名手本』——国名の稽古。単語と地理教材。

年代不明『手本』——地名、都市名、人名、畿内国名、単語と地理教材

単語と地理教材

年代不明『第貳手跡本』——漢字の熟語、日用文、用文章、漢字

章、漢字

年代不明『証文類手本』『証文類篇』『証文類続』『証文類後編』——借用証文、家作引 当証文、為替証文、蔵敷金証文

明治二十三年（一八九〇）『証文類集二』——借用証文など

年代不明『商売往来』『今也商売往来』——『商売往来』

のなかの織物の部分。

『今也商売往来』は少し変化した商売往来の内容。

商売道具、雑穀、樹木、金物、衣類、日用道具、化粧品、文房具など単語教材

明治期の田中家には長男政之助（政一、政市）が富野の出生に先立って誕生している。しかし手習い手本は欠落により残されていない。ただし『橋本市史 近現代史料Ⅱ』によれば政之助は明治六年に伊都郡伏原村の富岡文平に入門して手習いを、その後田辺出身の田中佐平より習字の教授をうけている。そして同年九度山小学校へ入学、翌七年には下等小学八級卒業、明治十一年十月九日には赤塚村・中道村共有の小学校である赤道小学（明治九年設立）の下等小学一級を卒業している。<sup>77)</sup>

E その他の子どもの手習い手本  
・その他―男児、野口太郎の学び

子ども期の手本八冊が残されていた。日用文章や短文稽古から『村名帖』による居住地周辺の村名稽古を経て、証文雛型の稽古、其の後はやや高度な名所記『洛陽物語』を稽古している。続いて『年中往来』の天地二冊により四季を通して月ごとの手紙文を稽古し、最後に『商売往

来』を修得して単語と教訓の学習で修了させた。

寛政六年（一七九四）ころに出生。下記の手習い稽古を経ている。

寛政十三年（一八〇一）享和元年）『手本』―日用文章、短文

享和元年（一八〇一）『手本』―短文、用文章

享和二年（一八〇二）『村名帖』―村名覚、在名など、単語と地理手本

享和三年（一八〇三）『証文帖』―借用証文雛型。日用文章

享和三年（一八〇三）『洛陽物語』―洛陽名所廻り、洛陽の土地名と歴史、廻り記

文化元年（一八〇四）『年中往来 天』『年中往来 地』―正月より八月まで（天）九月より極月まで（地）の各月の消息文章

文化二年（一八〇五）『商売往来』―「商売往来」全文

・その他―男児、堀内虎次郎の学び

出生は天保十一年（一八四〇）ころか。読み書き稽古過程を経て初学期を修了している。初学期の手本としては重厚さをもつ。男児用『今川壁書』の武家家訓をもと



にした教訓科教材で締めくくっている。

弘化四年（一八四七）『手本』—用文章短文、祝儀・送付の短文

弘化四年『人名帖』—人名の頭文字、日用単語も含む

嘉永元年（一八四八）『大日本国尽』—五畿七道の国名

同 『奉公人請状』—奉公人請状と篇

隣の部

嘉永二年（一八四九）『和歌浦名所』—和歌浦名所めぐり記

詞

同

「詞」ではじまる文

同

仕候」からはじまる

同

ではじまる文

嘉永三年（一八五〇）『洛陽物語』—洛陽名所廻り記

と和歌

同

道徳まで

嘉永四年（一八五二）『今川壁書』—今川状の内容。

応永十九年作。今川了俊による制詞。

## （二）田中家の子どもの手習い稽古のまとめ

文政期から明治初期の紀州紀ノ川沿い農村の上層農民、田中家の子どもの手習い稽古の過程と手本類について検討してきた。男児、女児ともに「いろは」の片仮名と平仮名から数字、短文の用文章による実用知識と請書などの証文書式の修得、『地名帖』による地理と単語学習、人名の頭字を集めた『人名帖』による単語と漢字学習、そして『年中往来』による消息文雛型の稽古、さらにすすむと『商売往来』、『和歌浦名所』を手本とした稽古にすすんでいる。それ以外にも『龍田詣』、『新今川』なども学んでいる。

これらの手本を基本とした上層農民の子どもの初学の手習い稽古の特徴は「いろは」文字に見られる仮名文字での基本の習得と、「地往来」系統の『地名帖』『和歌浦名所』『龍田詣』などによる居住地域空間の把握に繋がるといえる実用知識と生活教訓などから構成されている。近世後期から幕末にかけて上層農家族のなかで子どもは大切にされ、子育てでも意識化するなかで、初学の学習

は「いろは」「文章」「人名」「村名」「国名」「商売往来」「年中往来」「和歌浦名所」など内容の定型化の方向はこの地にも確立しつつあった。

### 【三】近世後期の農民の読み書き稽古の 総括的まとめ

近世後期、寛政期から幕末期までの民衆の読み書き稽古の具体的な実態を門人帳と往来物を中心に考察してきた。近年の識字研究の成果もあり、どのような内容をどのようにして学習したか、識字力獲得の実際をとらえる課題としても追求してきた。結論として以下のようにまとめることが出来る。

第一は「寿硯堂」の事例のように、近世後期の子ども達が直面していた年季奉公に出て自己の職能的自立を模索するために識字力は基礎的な、しかも欠かせない能力として重要視されはじめていた。それらは奉公人の器量をめぐるはげしい競争と切磋琢磨の渦中に自己を投入し長期間の研鑽を強いる苛酷さを伴っていた。初学の読み書き能力に続いて近世社会の大人達に求められた職業人

としての教養と職業知識にむすびついてどのような発展を遂げていったのかを解明することが次の課題となる。

第二は近世後期から幕末にかけて民衆世界に高まる教育熱により、民衆世界における子ども初学の学習は修得内容の定型化が自然発生的に進展しかなり成熟してきていることである。この時期には経験的にも初学の読み書きの内容は「仮名」「文章」「人名」「村名」「駅名」「国名」などの基本的な知識をまず単語や短文で学び、後に中級程度ともいえる「商売往来」「消息往来」「年中往来」など日用知識と生活上の教訓、手紙文の書式など実生活に密着した内容に収斂されている。と同時に男女別にみれば男児の必需の知識とされる「御成敗式目」「今川」など武家法や武家家訓の内容、女兒には「女今川」「女子三習」などの教訓的内容と家政的知識が付加された手本が学ばれている。

第三に民衆教育はあくまでも身分制支配の下にあつて身分内において近世芸事と文化の範囲のなかで読書と習字、算術稽古による修得が基本とされた。私的学習所としての寺子屋は地域の農民達の強いつながりのもとに生み出された自主的で自発的な稽古所であり、それ故に「商

売往来」に出てくる「稼業専一」「余力学問」という教訓にみられるように民衆世界の経済・社会・文化的状況に強く影響されている。幕末期には民衆世界に学習内容と過程が定型化されつつあり、それ故に手本が作成され流通して読み書きが急速に民衆世界に普及したと考えられる。

第四に幕末の民衆教育が定型化を辿ることと並行して地域密着型ともいえる「地往来」（地域の名所、旧跡、歴史的伝承を往来物の形態で後世の子どもに学習教材として往来物化し伝承する）の学習と版本化も進展していく。定型化の方向が同様の力で地域の生活や文化、職能面の進展を促し、「地往来」文化として花開いていたのではない。それらの全地域的な俯瞰も必要である。

### 【注】

(1) 「地往来」は近世の各地域で少なからず発刊された。概念規定をすれば地域に特筆される歴史伝承、名所、旧跡を美文や普通文で表現し、人々の暮らしのなかで伝承させようと往来物化したものであり、地域の人々に読書のための本として読まれ、あるいは子どもたちの手習い手本として文字稽古手本化されて伝承されたものである。筆者

の調査では大和地域奈良の『奈良詣』は奈良県大和郡山市の柳澤文庫に所蔵。『龍田詣』は版本としてかなり普及しており個人所蔵の書物としても保存率が高い。筆者は奈良教育大学図書館・教育資料館に所蔵されているものを調査した。『南都名所記』は往来物というより読書の本であり、東大寺をはじめ春日大社、興福寺など旧都奈良の名刹寺院や塔、仏像がとりあげられて名所・旧跡めぐりの書物として版本化されている。所蔵は柳澤文庫。『南都名所記』の出版元は「絵図屋庄八」であり、近世社会において東大寺南大門の門前に店を構えて奈良の名所絵図を販売して繁盛し『南都名所記』も発刊した。その版本は『奈良市史』編纂時に調査されている。

(2) 平成一四年度〜平成一七年度科学研究費補助金基盤研究(B)一般研究報告書『前近代日本における識字状況に関する基礎的研究』（研究代表者大戸安弘平成一八年三月刊）が出されている。【解説編】として川村肇「調査資料の概要と特徴」、木村政伸「識字能力推定の史料としての花押」、拙稿「中世末〜近世初期近江地域の農民の花押自署率についての検討」、大戸安弘「一向一揆を支えたもの」が収められている。【資料編】には京都市歴史資料館所蔵写真版、東寺百合文書、大原観音寺文書、葛川明王院文書、大嶋・奥津嶋神社文書、今掘日吉神社

文書、近江八幡市岩倉恵比須講石工文書、福井県文書館所蔵複製版、生田家文書、勝鬘寺文書がとりあげられ農民による自署花押がなされた文書史料の一部が写真版にて花押自署の形態と筆跡が集録されている。公家や武家の花押研究は進展しているが、農民の自署した花押研究は未開拓であり、農民の自署花押の形態、筆跡から農民階層の文字との関わり、識字状況を検討する試みはほとんどまわっている。

- (3) 寺子屋「寿硯堂」は寺子屋門人帳『寛政四壬子年 門弟衆名前帳 四月朔日』が存在する。三重県松阪市の中村芳彦氏所蔵。すでに『三重県史 資料編近世5』（一九九四年 平成六年三月三十一日刊）にて「三六 寿硯堂門弟衆名前帳」（九二八〜九九五頁）として翻刻され掲載されている。写真は『三重県史 資料編近世5』の「口絵1」から転載した。

- (4) 西坂靖『三井越後屋奉公人の研究』東京大学出版会 二〇〇六年一月二二〇日刊

同書一三〇頁注（二一八）において西坂氏は「奉公人の側から言えば、子供時代は一度奉公先との不適合があったとしても別の店舗への奉公替え可能な時期である。（中略）奉公人の側からもある程度奉公先を取捨選択することが可能な時期といえるのではなからうか」と推測されている。

る。「寿硯堂」門人帳からも子どもの奉公先変更事例はあった。

- (5) 前掲、西坂靖『三井越後屋奉公人の研究』では「奉公人数、奉公人組織、手代昇進、手代の報酬、手代の欠勤時間管理と勤務状況、手代の規律違反と処罰」などが検討されている。とくに子供には「無礼」の禁止と「慇懃」の強制」と規律遵守には処罰を含むきびしい管理がなされたようである。

- (6) 三井文庫編『三井事業史』本編一卷（一九八〇年九月一日刊）、同二巻（一九八〇年九月一日刊）、同三巻上（一九八〇年九月一日刊）、資料編一（一九七三年一月一日刊）、同二（一九七七年二月一日刊）、同三（一九七四年七月二五日刊）、同四上（一九七一年八月一日刊）、同下（一九七二年七月二五日刊）

- (7) 寿硯堂の門人帳によれば塚本村の「佐波久吉」は寛政九年正月二十六日入門し「子四月まで二而休ム、同五月十四日二出立、大坂三井御店へ出勤ス、卯極月十六日元服ス、久五郎ト改名ス、巳年正月母死去、未ノ四月二十六日初下り着、又出立ス、子八朔二金毘羅下向ノ節立寄ル、丑四月五日病氣二而下ル、おとわ金毘羅へ志し、大坂へ寄候処病氣ヲ見、其儘通し籠二而同道ス、讃岐ハ不參之由、同極月四日養生不叶死去ス」とある。

(8) 前掲門人帳によれば、寺子屋所在地の塚本村庄屋、半右衛門の息子の半三郎は寛政十一年に入門し「申正月二十六日ヨリ来習始、子二月三日ヨリ大学素読始メ、文化二丑閏八朔二秀三郎ト改名、卯正月ヨリ休ム、舟江へ謡習二行、同六巳春元服ノ上文吾ト御改名被致候、同十三年子二月御病死」とあり、初学と大学素読、謡を習つてい

る。  
(9) 前掲門人帳の「藤村いく」は塚本村の儀右衛門の娘で享和三年、七才で入門した。「文化二丑三月八日出立、江戸父母とも下り、同四月二十八日二帰宅ス、丑秋腫物二テ休ム、又來ル、文化六巳正月二十五日二上ル、歌一首來ル、手本ハ曾根氏之由、右二有、行違ふ道のしるべノ夢そ師の教に荊曲ふみわけて見る、父逼塞ス、肝煎納庄屋御勤也、戌冬卯八角家屋敷入替ル、亥春卯八方勝三郎ノ妻二縁組ス、子二月八日二女子安産ス、文政元寅五月十五日母死去ス、同三年辰七月病死ス、勞せずて習ひ得しこそ師のかげにたちつ居つにも身をかへり見る、去人ノ狂歌杉原ハ写遣ス、張清書」とあり、転変はげしい人生を振り返り歌を詠んでいる。

(10) 二〇一三年五月一日奈良女子大学で開催された「書物・出版と社会変容」研究会において、筆者の報告に際し「女子三習」とは読書・習字・裁縫を意味するとのこと教

示をいただいた。記してお礼申します。

(11) 前掲研究会の筆者報告に際して一帖は双紙二〇枚であることもご教示頂いた。記してお礼申します。

(12) 『三重県の地名』日本歴史地名体系第二四巻 平凡社

一九八三年五月二〇日刊 「行政区画変遷、石高一覧」

一〇三三〜一〇三四頁「名張市」の項目参照。

(13) 三重県名張市史編纂室に寄託されている中村家史料にある『乱舞入門控』。大西家が所蔵している。

(14) 前掲名張市史編纂室に寄託された大西家所蔵の中村家史料に中村権平が開業した寺子屋「栄寿堂」の入門帳三冊がある。

(15) 近世後期、紀州紀ノ川流域の上層農民、田中家の子どもの学習事例をとりあげたが、史料からみる限り、子どもは大切に養育され、初学の基礎から中級へと系統的に手本を宛がわれて読み書き稽古がどの子どもにも丁寧に行われていたことが伺える。子どもの学びの手本の定型化はこの地でも進展しており、各地で共通していることが確認された。

(16) 石川松太郎監修。小泉吉永編著『往来物解題辞典 解題編』四三四〜四三五頁「新 今川童子教訓条々」参照

(17) 『橋本市史 近現代史料Ⅱ』七七七〜七七九頁参照

表(1)「寿硯堂」門弟名・村名・奉公先・奉公年令・入門年・修学期間について

(項目番号は梅村が付した門弟の通し番号)

番号	男児名	村名	奉公先	奉公年令	入門年	修学期間
2	安野弥吉	塚本村	○曾原山方 ○傳右衛門方		寛政 4.4.1	5ヶ月
3	中村三五郎	塚本村	角力に入る		同	3年5ヶ月
4	鈴木兵次郎	塚本村	○妻を奉公に		同	3年5ヶ月
6	加藤幸次郎	塚本村			同	1年8ヶ月
7	中村与惣松	塚本村	○曾原、山口傳右衛門方 一竹工		同	2年5ヶ月
8	田子喜六	塚本村	○下之庄村箸や		同	2年5ヶ月
9	杉浦兼松	塚本村	○魚町又は六軒須川にて 芝居		同	1年5ヶ月
10	西村源太郎	塚本村	○大五郎方へ ○名残元翠郎方		同	1年9ヶ月
11	中村文五郎	塚本村	○嶋貫へ行く ○江戸新材木町 長井氏嶋屋		寛政 4.4.12	4年5ヶ月
12	鈴木久吉	塚本村	○江戸糺町岩城升屋		同	3年9ヶ月
13	林 龜松	塚本村	○川井町紺屋		同	2年9ヶ月
15	藤村与惣松	塚本村	○江戸尾張屋 蛭子屋	13才	寛政 5.1.26	4年11ヶ月
18	北川松次郎	塚本村	○奉公一行方不知		同	5年7ヶ月
28	出口常吉	久米村	○江戸元浜町 松坂や(伯父)		寛政 8.2.8	4年4ヶ月
29	東浦長藏	久米村	○文化3年 次左衛門方	20才	同	3年4ヶ月
30	東浦民次郎	久米村	○		同	4年10ヶ月
32	小林長次郎	上ノ庄村	○江戸三田荒木や	11才	寛政 8.7.26	11年
33	中村磯松	大塚村	○江戸長谷川町荒木 ○江戸糺町岩城升屋		同	1年6ヶ月
35	川村乙次郎	出曲村	○江戸三田荒木ノ店		寛政 8.10.25	
39	田川勘松	出曲村	○伊勢寺村へ		寛政 9.1.26	2年
40	佐波久吉	塚本村	○大坂三井店		寛政 9.1.28	7年3ヶ月
42	鈴木磯次郎	塚本村	○松ヶ崎酒屋 ○大坂	12才	同	5年7ヶ月
43	山路文太郎	塚本村	○江戸浅草嶋屋		同	5年
44	西村音吉	塚本村	○江戸嶋屋 ○元翠老		同	1年11ヶ月
46	中村栄次郎	塚本村	○大坂佐野屋		寛政 9.3.6	4年
48	津田友吉	上之庄村	○江戸縁者		寛政 9.8.23	1年7ヶ月
52	鈴木甚吉	塚本村	○江戸浅草見付 嶋屋	13才	寛政 10.2.14	4年10ヶ月
53	水谷清藏	塚本村	○市右衛門庄五郎方へ ○卯八方へ	7才	寛政 10.2.14	6ヶ月
54	水谷武藏	塚本村	○久右衛門方へ ○江戸へ ○西丸医師渡辺方へ ○両国彫物師		同	不明

58	上山七十郎	美濃田村	○宮村善助方へ	21 才	寛政 10.4.1	不明
62	小林為吉	上之庄村	○三井本店	13 才	寛政 10 年盆前	不明
64	青木次郎	塚本村	○江戸長谷川町田原や	11 才	寛政 11.1.28	2 年 7 ヶ月
65	森嶋仙之丞	塚本村	○大坂三井本店		同	5 年
66	中村市太郎	塚本村	○江戸浅草見付嶋屋	13 才	同	4 年
67	加藤石松	塚本村	○庄五郎方		同上	2 年
69	中村嘉七	大塚村	○江戸亀屋 ○又吉方 ○百足町小津新兵衛方 ○本町 竹井方 ○吉本方	14 才 21 才 27 才	寛政 11.2.3	1 年
71	岡田軍太	塚本村	○三井江戸向店	13 才	寛政 12.1.25	1 年
72	中村亀次郎	美濃田村	○三井宗十郎方 ○紺屋町長谷川方 ○殿村隠居方から白粉町かしや	24 才 26 才 32 才	寛政 12.1.26	2 年
73	中村勇次郎	美濃田村	○江戸	13 才	同	2 年
75	小林音吉	上之庄村	○江戸尾張町亀屋		同上	不明
77	小林政五郎	久米村	○魚町 長谷川方	13 才	寛政 12.1.28	不明
78	斎藤与惣次郎	塚本村	○大坂表	11 才	同上	4 年
81	富倉徳松	塚本村	○江戸岩城店	12 才	同上	3 年
82	森嶋善三郎	塚本村	○江戸材木町長井店	12 才	同上	4 年
84	出口与惣吉	久米村	○江戸本町長谷川店	14 才	寛政 12.4.1	6 年
87	河村与惣三郎	出曲村	○江戸尾張町夷屋	12 才	寛政 12.5.9	5 年
88	小林浅吉	上之庄村	○江戸尾張町夷屋	12 才	寛政 12.5.15	5 年
94	福田弥五郎	舟江村	○江戸尾張町蛭子や	13 才	寛政 13.1.29	1 年
95	松野貞次郎	舟江村	○京都目見三井両替店	14 才	同上	1 年
97	上山八之助	美濃田村	○江戸尾張町夷屋	14 才	享和 1.2.26	5 年
98	笠原兵之助	美濃田村	○辰五郎方 ○美濃田信助方	19 才	享和 1.4.1	4 ヶ月
100	刃根友吉	松崎片町	○津へ	13 才	享和 1.7.28	2 年
103	中村三之丞	久米村	○江戸尾張町布袋や	13 才	享和 2.2.28	3 年
104	山上乙五郎	舟江村	○江戸駿河町向店	13 才	同上	4 年
105	斎藤谷五郎	塚本村	○魚屋 腕や ○伊賀町蠟燭や	12 才 15 才	同上	3 年
106	曾祢代三郎	塚本村	○三井店 ○三井大坂本店	11 才 12 才	同上	3 年
107	中村次郎吉	曲村	○津屋城	12 才	同上	3 年
109	中村勘藏	久米村	○鍛冶町紺屋	18 才	享和 2.2.20	不明
111	山口彦次郎	塚本村	○湊町浜田や ○三井店大坂	12 才 14 才	享和 2.8.1	5 年
112	村田鉄五郎	舟江村	○江戸駿河町本店	12 才	享和 3.1.22	4 年
114	藤村平四郎	久米村	○津、奥田氏方 ○江戸		享和 3.1.4	4 年
115	東浦長之助	久米村	○三井店 ○江戸糝町岩城升屋	12 才	享和 3.1.6	6 年
116	鈴木新太郎	塚本村	○幸十郎方	14 才	享和 3.1.18	6 年
119	上山常九郎	美濃田村	○京都	14 才	享和 3.2.8	5 年

			○三井店	16才		
121	和田嘉藏	舟江村	○尾張布袋屋	13才	享和 3.2.13	5年
122	富田定吉	舟江村	○京都蛭子屋	13才	同上	6年
125	別処源藏	塚本村	○江戸糺町岩城升屋 ○聖橋、萬屋九兵衛	13才	享和 3.5.22	1年
130	藤村政吉	塚本村	○たばこ屋 ○三井則右衛門 ○舟江へ大工	14才 16才	享和 4.1.26	7年
131	水谷喜藏	塚本村	○江戸糺町岩城升屋	12才	享和 4.4.3	3年
136	□□倉吉	曲村	○江戸へ	13才	文化 1.1.3	2年
142	加藤吉藏	川井村	○江戸尾張町夷屋	10才	文化 2.2.12	1年
143	村田周藏	舟江村	○川崎へ	14才	同上	2年
144	長森六松	舟江村	○白粉町ぬしや	12才	享和 3.8	6年
146	斎藤甚之丞	塚本村	○江戸三田、荒木店	16才	享和 4.2.24	5年
147	石畑百松	不明	○本町、春田へ ○江戸槌屋店	13才	文化 1.4.1	4年
156	松葉巳之助	曲村	○江戸本町、長谷川店	14才	文化 1.8.24	5年
157	大河内与惣五郎	塚本村	○京都の道具屋	15才	文化 2.1.26	6年
158	梅谷亀松	曲村	○江戸	11才	文化 2.1.26	11ヶ月
159	中村金藏	(瑞竜寺)	○江戸津曲端や ○大坂へ	11才	同上	1年
168	松田藤吉	川井町	○江戸蛭子屋	13才	文化 1.11.25	2年
178	庄司亀之助	美濃田村	○江戸尾張町布袋屋	14才	文化 3.2.6	不明
183	古市仙次郎	曲村	○江戸岩城升屋	13才	同上	2年
184	中村亀吉	久米村	○江戸 ○黒部高洲		文化 3.2.7	4年
185	中村与三五郎	不明	○江戸木槌屋ノ店	9才	文化 3.2.9	不明
188	高田平次郎	舟江村	○西町大石屋	11才	文化 3.3.7	6年
190	山村弁之助	西町	○江戸長谷川店		文化 3.3.22	4年
191	□□勇次郎	塚本村	○大坂へ		文化 3.7.26	3年
196	東浦紋之助	久米村	○江戸、夷屋	14才	文化 5.1.26	4年
199	山上善藏	伊勢寺村	○同村酒屋	13才	同上	2年
200	飯芝竹之助	黒野村	○江戸尾張町亀屋	15才	同上	11ヶ月
201	飯芝百三郎	黒野村	○京都、恵美須屋へ		同上	6年
206	東浦甚之助	久米村	○岩城升屋	13才	文化 5.2.12	4年
209	松葉八五郎	曲村	○江戸芝口、松坂や		文化 5.2.16	5年
215	奥村円次郎	曲村	○江戸芝口、松坂や		文化 6.2.5	4年
217	井上熊三郎	舟江村	○本町三井店	13才	文化 6.2.29	5年
218	田中猪之助	上之庄村	○江戸尾張町夷屋		文化 6.3.18	4年
220	福田元次郎	西大塚村	○江戸大和や	12才	文化 6.7.25	2年
221	竹之内熊次郎	殿村	○夷や		同上	1年6ヶ月
222	松尾勇次郎	大塚村	○江戸尾張町蛭子や		文化 6.7.27	4年
224	中村勇吉	美濃田村	○松坂本町さげやへ ○魚町大倉 ○大坂へ	20才	文化 6.8.1	6年
228	一色菊之丞	舟江村	○江戸尾張町夷や	12才	文化 6.8.2	3年
230	岡田嘉藏	塚本村	○江戸駿河町向店	12才	文化 6.8.20	6年
232	田根佐吉	町平尾村	○坂田五郎兵衛殿へ ○魚町たばこやへ	12才	文化 6.9.3	1年



			○大坂升屋			
235	曾根代次郎	塚本村	○大坂大丸や		文化 7.1.28	4 年
236	曾根孫次郎	塚本村	○江戸尾張町夷や本店		同上	6 年
238	加藤辰五郎	大塚村	○魚町麻や ○江戸へ	22 才	文化 7.2.10	5 年
240	出口為吉	久米村	○江戸夷や	13 才	文化 7.2.12	3 年
241	梅谷弥吉	曲村	○江戸田端やへ	14 才	同上	5 年
243	中村豊吉	久米村	○日野町長井へ		文化 7.2.20	5 年
249	竹内角三郎	殿村	○江戸尾張町布袋や		文化 8.1.26	3 年
253	東浦半藏	久米村	○親類へ行 ○本町則右衛門 ○久米村内		文化 8.1.28	3 年
255	安野亀吉	塚本村	○京下村大丸や ○江戸大丸店	12 才	文化 8.2.4	2 年
264	大河内吉之丞	塚本村	○夷や	14 才	文化 8.2.21	5 年
269	水谷熊藏	塚本村	○京、大丸や	11 才	文化 8.7.26	3 年
270	坂本屋音五郎	塚本村	○奉公に行		同上	3 年
273	田根与惣吉	町平尾村	○則右衛門方へ奉公 ○大坂大丸やへ	13 才 15 才	文化 8.8.1	4 年
278	樋口源次郎	舟江村	○本町半期勤める		文化 8.8.25	不明
282	長森浅吉	舟江村	○江戸糺町岩城店		文化 9.1.26	4 年
283	高尾吉三郎	塚本村	○江戸、蛭子や	13 才	同上	1 年
285	伊藤喜代松	舟江村	○奉公		文化 9.2.5	2 年
287	中嶋熊吉	丸之内	○江戸、田端や		文化 9.2.9	3 年
288	森口又吉	塚本村	○山城や		文化 9.2.17	4 年
294	川北佐市	川北町	○川原佐稻懸銀助		文化 9 冬	1 年
295	川井伊之助	美濃田村	○江戸尾張町夷屋		文化 10.1.26	2 年
296	藪下太三郎	塚本村	○大坂大丸や	12 才	同上	5 年
303	藤村定市	塚本村	○江戸荒木へ ○三田の酒屋小西へ		文化 10.2.11	3 年
307	飯芝与惣吉	黒野村	○京都蛭子や		文化 10.2.15	1 年
310	安野善三郎	藤藏角新宅	○大坂三井店	13 才	文化 10.4.3	4 年
312	高田弁次郎	舟江村	○岩城升屋		文化 10.9.5	3 年
315	藤村茂吉	塚本村	○津伊予町八田や ○薬王寺村もめんや	13 才	文化 11.1.26	5 年
316	中村寅次郎	東大塚村	○小津与次大夫		文化 11.1.28	5 年
317	加藤富五郎	東大塚村	○大坂三井店		同上	3 年
328	小泉稽次郎	曲村	○江戸田端や	12 才	文化 11.2.11	8 ヶ月
345	辻本清次郎	野村	○江戸尾張町布袋や		文化 12.1.26	1 年
346	中野弥三郎	野村	○江戸尾張町布袋や		同上	1 年
356	堀江久吉	市場之庄村	○岩城升屋		文化 12.4	1 年
360	伊藤為次郎	曲村	○伝馬町長谷川		文化 12.4.24	5 年
365	中野菊之丞	野村	○江戸布袋や		文化 13.1.25	2 年
372	□□佐市	舟江村	○垣鼻村楽焼はしやへ	12 才	文化 13.2	5 年
373	高橋市之丞	舟江村	○三井向店	12 才	同上	5 年
374	加藤宇吉	塚本村	○京都へ ○江戸大丸や	11 才	同上	3 年
387	刃根梅之丞	松崎新規	○江戸三井向店	11 才	文化 14.8.4	2 年

		町				
391	瀬古与八	黒野村	○江戸小津の店	13 才	文政 2.8.8	2 年
394	安濃三次郎	塚本村	○江戸岩城升屋	11 才	文化 14.8.11	3 年
406	久保竹松	美濃田村	○江戸前や店		文化 15.2.4	10 ヶ月
407	中村幸之助	大塚村	○江戸田端や	14 才	同上	2 年
423	出口常三郎	久米村	○江戸伝馬町長谷川へ	12 才	文政 2.4.16	不明
428	伊藤増之丞	舟江村	○江戸三井向店	13 才	文政 2.8.19	3 年
429	田中十吉	舟江村	○江戸布袋や	14 才	文政 2.10.3	4 年
431	堀川熊次郎	塚本村	○江戸岩城店	11 才	文政 3.2.3	1 年
442	小川石松	舟江村	○江戸市ヶ谷大黒や		文政 4.1.26	2 年
448	田中伊三郎	上之庄村	○江戸難波町		文政 4.2.3	2 ヶ月
449	加藤勘次郎	塚本村	○江戸蛭子や		文政 4.2.8	3 年
465	中村良次郎	大塚村	○江戸田端や		文政 5.1.14	3 年
466	森川嘉市	名残村	○江戸尾張町蛭子や	12 才	文政 5.1.26	1 年
470	村口伊三郎	久米村	○江戸尾張町蛭子やへ	12 才	文政 5.2.6	3 年
以下女兒門弟						
2	藤村てい	塚本村	又吉方へ ○庄屋方へ ○文化 15 小使		寛政 5.4.3	8 ヶ月
3	斉藤ささ	塚本村	○名残舟江へ		寛政 5.10.14	1 年 2 ヶ月
7	川北もと	塚本村	○		寛政 6.2.27	2 年 10 ヶ月
8	西村きの 後さとと改名	塚本村	○山田上ノ町十五軒ノ内 ○川井町中屋	15 才	寛政 6.2.27	3 年 6 ヶ月
9	加藤さわ	塚本村	○山田		寛政 6.8.1	2 年 5 ヶ月
16	別所るい	塚本村	○山田		寛政 8.7.26	不明
24	中村たか	久米村	○射和へ		寛政 10.10.26	3 年
25	□□せう	塚本村	○西町桶屋へ	22 才	寛政 12.1.28	3 年 6 ヶ月
26	藤村八重	塚本村	○みのだ、庄司へ		寛政 12.1.28	1 年 5 ヶ月
30	山田ひで	久米村	○曲村、小泉氏へ株立		寛政 12.2.4	6 ヶ月
31	西 そで	塚本村	○曾原、茶屋奉公		寛政 11 秋	2 年
36	藤村すえ	塚本村	○松坂、仕立て屋	20 才	寛政 12 盆	6 年
			○木造、用助方へ		享和 1.7.26	
37	庄司ひな子	美濃田村	○中嶋伝右衛門方へ ○庄司氏へ	18 才	享和 2 正月 久米惣四郎へ 手習い入門	5 ヶ月
45	東浦じう	久米村	○万濃へ		享和 2.2.19	3 年
49	松野さよ	船江村	○長谷川へ		享和 3.1.22	3 年
58	西村くま	塚本村	○川井町中屋 ○大すかやへ	14 才	享和 4.2.3	2 年
70	曾根いの	塚本村	○金谷円二へ奉公	18 才	文化 2.2.9	2 年
79	中村きやう		○町方へ奉公	18-19 才	文化 3.8.1	1 年
81	武藤とら	塚本村	○町方へ奉公		文化 4.1.26	3 年
85	小津屋八重	職人町	○白堅氏		文化 4.8.3	9 ヶ月
90	中村くに	塚本村	○愛宕町、中尾久右衛門 へ奉公、直ちに帰る	13 才	文化 5.2 初午	2 年 6 ヶ月
95	木屋すゑ		○又吉へ子守に		文化 6.8.3	約 1 年
111	藤村こん	塚本村	○富蔵方の守 ○大塚儀右衛門方へ奉公	10 才 15 才	文化 10.1.26	2 年
118	舟木屋ひさ	元井川町	○美濃田村、新蔵方へ子 守	12 才	文化 11.1.26	1 年

出典『三重県史 資料編 近世 5』（1994年3月31日刊）第六章、教育「36. 寿硯堂門弟衆名前帳」（pp. 928～995）より作成。